

外来でみる小児のコモンな感染症

久田 研

久田小児科医院

今回の小児科診療の特集テーマは、『外来でみる小児のコモンな感染症』です。小児の感染性疾患は、新型コロナウイルス感染症のパンデミック前後で、一時的な激減と、その後の「揺り戻し」による急増により、流行状況が大きく変化しています。2023年、ヘルパンギーナは過去10年で最多レベルの流行でした。2025年は伝染性紅斑が過去10年で最大規模に流行しました。百日咳も過去最多レベルの全国的な流行状況にあり、マクロライド耐性化が懸念されています。マイコプラズマも同様に再流行しています。このように小児感染症は、季節性も含め従来の周期的な流行が崩れ、そのパターンは不規則化しています。そのような状況を鑑み、小児の一般的な感染性疾患を見直し、より適切な診断と治療、また、その予防につながるよう今回の特集を企画しました。

本特集では、外来診療でよくみる小児の感染性疾患を、臓器ごとにまとめ、それぞれの分野で活躍されている先生方に専門的な視点から解説をお願いしました。感染性疾患は、視診からの診断も大切です。特徴的な所見があるものは、写真の掲載をお願いしました。外来診療にあわせて、疾患名からの解説ではなく、視覚や主要な症状を入り口として、想定される疾患と鑑別について解説いただきました。疾患の説明には、保護者への説明を含めていただき、鑑別疾患は感染性疾患に限らず重要な非感染性疾患があれば鑑別のポイントを含め解説いただいています。そして、最後に、その疾患に関連する最新情報やトピックスを織り交ぜて解説いただきました。外来でみるコモンな感染症がテーマです。これから小児の外来診療をはじめられる先生方には、その基本的な解説書として、小児診療を専門とされる先生方には、基本的な疾患をあらためて理解するとともに、最近の知識を得られる特集として、お役立ていただければ幸いです。

最後になりますが、このような機会を与えていただきました本誌編集主幹・編集委員の先生方、診療でご多忙のなか執筆をご快諾いただいた著者の先生方、そして、編集部の方々に深謝申し上げます。